宗教者の役割

鎌田東二さんに聞く

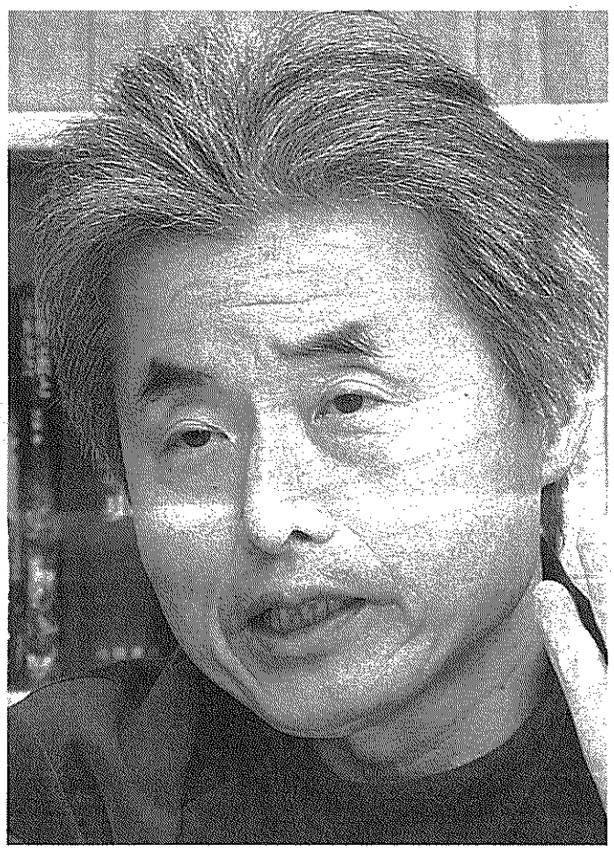
宗教者と宗教学者はいまこそ社会貢献的活動を

宗教哲学者の鎌田東二さん（61）は、所属する京都大学こころの未来研究センターに昨年4月、新研究プロジェクト「こころの再生に向けて」を立ち上げた。

各地の宗教学者や宗教者と連携し「心直し」と「世直し」をキーワードに、大震災で痛手を負った人々の心を癒やすための道筋や原発事故後の社会のあり方を探っている。メンバーは随時、書籍やネットで論考を発表し、2016年3月をメドにプロジェクトを集約する報告書を出す。

「東日本大震災では阪神大震災の時に比べ、宗教者が前面に出て活動している。今年3月11日時点で死者1万5854人、行方不明者3155人。津波で何十キロと流された身元不明の人もいて、死者との向き合い方、弔い方が阪神の時以上に問われたことが理由の一つです。祈ることは宗教たるゆえん。弔いは日本で主に宗教者が執り行ってきた。ボランティアで読経がなされたのもこうした事情からです」

「夫や妻、子供を突然、亡くした人たちの喪失感は深く、『心のケア』以上の人生観・他界（死後の世界）観までをも含む『まるごとケア』が求められている。こうしたケアへの宗教者の取り組みが傾聴ボランティア。テーブルやベンチなどを積んだ軽トラックで被災地を巡ってカフェコーナーを設け、ふらっと訪ねて来る人の話を聴く活動も生まれた。茶飲み話をするような雰囲気で言葉を交わすことで、心の痛みに少しでも寄り添い、和らげられればという試みです。彼らはカフェを絶対に布教活動の場にはしないと自戒しながら行っています」



かまた・とうじ　京都大学こころの未来研究センター教授、NPO法人東京自由大学理事長。1951年徳島県生まれ。国学院大学大学院文学研究科神道学専攻博士課程修了。京都造形芸術大学教授などを経て現職。17歳で聖地巡礼に目覚め、国内外の聖地を参拝して回っている。著書に「現代神道論」など。

「心直し」で社会貢献を

万年単位の視座必要

「宗教学者も何ができるかが問われている。私が思うに、一つは宗教者のネットワークの基盤になること。特定の宗派の呼びかけだと参加しにくいが、宗教学者が核になれば様々な立場の人を包含しやすい。大学を軸にネットワークができたのは自然な流れだ。全国の宗教者が大震災にどう向き合っているかの情報を共有し、活動を支援したい」

「心直し」と「世直し」が求められている

鎌田さんは、人間は倫理的な生き物との信念を持ち、よりよい生き方をするために困難に立ち向かうことを「世直し」と考えてきた。思想や方法論は人によって違うが、人間の観念や使命感が経済などの社会構造を変える力を持つとの立場だ。

「自殺者は1998年以後14年連続で3万人を超えた。阪神大震災の起きた95年の自殺者は2万2445人。私は震災を機に、物質主義から精神的なものを大切にする世界観への転換がなされると考えたが、そうはならずに社会状況は悪化した」

「振り返ると、大きな行き詰まり感から60年代末に社会構造への問いかけがあった。学生運動です。だが、解決策を提示できず、問題を突きつけただけに終わった。学生運動は産業形態や環境・エネルギーの問題にとどまらずライフスタイル、つまり生き方も問題にした。心直しは60年代末から求められていたと考えています」

90年前後に、自己啓発セミナーや自分探しの流行という形で顕在化し、2000年代になって全面展開したと指摘する。

「理由は最近のパワースポットブームなどです。パワースポットとされる聖地・霊場を訪ねる理由は、そこで何らかの力を得たいとの思いからでしょう。その背景には、家族にも地域にも自分の支えを見いだせない状況がある」

「ブームについて言えば、聖地・霊場はどのような地が選ばれているかや、その地での祭りなどにも思いを致しながら訪ねてほしい。これらの土地は自分一人の心を癒やす場ではなく、精神的なものを保つ場として地域の絆の役割も果たしてきているんです」

1000世代先に責任を持つ覚悟で

昨年5月と10月の2度、それぞれ4日かけて仙台市若林区から岩手県久慈市まで三陸沿岸約300キロを野宿をしながら車で巡った。神主の資格を取得している鎌田さんはこれまで訪ねた先に海があると禊ぎをしてきた。だが、この時は放射能汚染水が海に流れ出たことが頭をよぎりためらった。原発事故は宗教的世界観の基盤にもヒビを入れたと痛感させられたという。

「原発事故で放出されたプルトニウム239の半減期は2万4000年とされます。これまでとは全く違うスパンの視座を求められているわけです。日本の宗教文化は四季の巡りを核にし、すべてを自然がきれいにしてくれるという世界観をもっていた。原発事故はこれを揺るがした。こうした毒素を日本列島に抱え込んでしまった事実を踏まえ、どのような解決策を見いだすかを突きつけられている」

「誇大妄想とも思える万年単位の未来を語れるのは空想科学小説と宗教だけでしょう。弥勒信仰では弥勒菩薩は釈迦の滅後56億7000万年後に、釈迦の救いに漏れた人たちを救うためやってくるとされます。もちろん弥勒信仰をみんなが持てるとは思いませんが、昔の人々が永遠のような遠い未来に救済を求めようとした思想的基盤は考える必要がある。宗教的救済観や世直しモデルを学術的にきちんと位置付けられれば、万年単位の構想を考える上で、思想資源として活用できると思うからです」

「現代は凄惨な事件の発生や金融危機などで、社会構造の再構築を迫られている時代だと考えます。過去と未来に照らして私たちの置かれている位置を正しく認識し、使えるものを全部使えば問題解決の芽が生まれてくるのではないか。みんなで試行錯誤し続けましょう。希望は自ら見いださなければなりません」

（編集委員　小橋弘之）

うたた寝

センボンヤリ（千本槍）　キク科の多年草。春に10センチほどの花茎をだし、紫色を帯びた白い花をつける。

え、父親の意向で学業を断念し農地開拓に従事した。

kokoro@nex.nikkei.co.jp

シニア記者がつくるこころのページ　（毎週土曜に掲載）